
最弱の英雄伝

かぼちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱の英雄伝

【Nコード】

N7682Y

【作者名】

かぼちゃ

【あらすじ】

そこはふつうのせかいのはずだった
しかしある日

勇者に騎士、狼男、魔法使い、超能力者にバンパイアなどなど人間の非科学的才能っていう才能が開花し始める

そんな中元々非科学的な才能を売りとしていた占い師や手品師はガングアンすたれていく

何と言ってもそんなことは結構な人が出来るようになってしまったのだ

そんな時、呪術師の家に生まれた黒独 尊がそんな奴らに嫌がらせをするためだけに才能を開花させたものが集い才能を磨く大学に入学する

プロローグ

いきなりだが少し昔話をしようか

ここ数十年のことなんだが宇宙人が飛来してきた
いや待って閉じないで私だってわかってる意味わかんないって
だけど降ってきたんならしょうがない

しかし宇宙人の飛来は地球人の本来の力を発揮させた

魔法使いに超能力者、忍者に騎士に狼男にバンパイア
そんな奴らになる人間が現れた

宇宙人も度肝を抜かれただろう
私だってそうだ

家が高貴な家系なのは知っていた
しかし私が騎士になるとは

生存本能がトリガーだったのかもしれない
うちゅう人に襲われたときわたしは剣が地面から生えてきて
気付けばそいつらを一人残らずたおしていたのだ

他のところもだいたいそうだったらしい
今では約8割の人間が能力者だ
そついわれるのを嫌われる奴もいるが

これによって人類は持つ力がそのまま序列になった
一般階級である私はこの騎士の絶対的な力によって
王族に準ずる身分となった

「お嬢様、そろそろ学園に向かう時間でございます」

「うむ、遅れてはいけないな、さっそく登校しよう」

「ちっ成金が」

「今舌打ちしなかったか」

「いいえ」

わ、私偉いんだけどなー

ちなみに彼女は国から支給されたメイドさんであり私の世話をしてくれる

たしか彼女も能力者だと聞いている

なんだか忘れてしまったが確か紹介の時の資料に書いてあったはずだ

「私、お嬢様と比べると非常に劣る能力ですがケルベロス憑き、獣化でございます」

この人思考読みの能力じゃないのだろうか
なんか怖いんですけど

プロローグ（後書き）

よろしくお願ひします
記念すべき第一話！！

第一章、不幸な女の子

ここは才能のあるものが集う大学
その始業式である

私、鈴木 サチはこの超有名校に受かったのだ
試験は超がつく難易度である

試験とは基本学科試験である

合格点は600点ほかの学校とは違いこれを超えれば必ず入学できる
しかし学科試験の満点は600点
大学の試験で満点などとれる人間はまずいないだろう
とれたとしたらその人は能力者だ

実はこの試験の前に能力の点数を決められる
その点数が学科試験の点数に追加されるのだ

例えば私の能力は見えないものを見る力、点数は260点
ちなみに学科試験は397点だ
自慢じゃないが平均点180点のテストである
見えないものって何かって？
なんか人が能力を使うときの波？みたいなもんが見えるだけである
それだけで260点まつたくいい世の中だ

ちなみに炎を口から出す超能力者の人は820点
魔法使いは1200点

主席の人は確か「聖なる騎士」という能力で
8万と6千点だったはずだ
私の努力はなんなのだという話である

今その人のが主席の挨拶をしている

何という波だろうかこんな濃い色は見たことがない
ってかまぶしいな真っ白な波だよ

だけど私の興味はそこじゃない

能力持つてる人って怖いし

友達がほしくてあまり能力を持っていなそうなの
つまり波が見えない人を探していたのだが
前に座っている人が波がほとんど見えないのだ

いやかすかに黒い渦がどよめいているみたいだけどかなり薄い
これはいける

ちよつと男の子ってところがハードル高いけど
勇気を出して声をかけてみよう

この時は知らなかった

この人が下手な能力者よりも全然厄介な人だってことを

第一章、不幸な女の子（後書き）

みんな大好き鈴木サチさん登場回でした
ごめんなさい次から主人公出します

呪術師

>章Ⅱ呪術師<

俺の家は呪うことを仕事にしている
藁人形とか作ってるわけだ

特別な力なんてない

恨めしいあいつを転ばせるくらいしかできない

だけど俺は許せなかった

呪いなんて信じなかった人間が魔法や超能力を
いきなり出来るようになって

前からいた俺たちみたいな奴の力は相変わらず信じようとしないう
てことに

この悔しさがわかるか？

いま俺は能力を開花させた奴らが集まる大学に編入した
ここで俺の力を見せつけてやる
たとえば何も見せつけるものがなくなったら

どうやってここに俺が編入できたかって
手品を見せてこれが俺の能力ですって言うたら
180点ももらえた

勉強なんか全然簡単だった
悔しさをばねに勉強したのだ

「あのーすいません
わ、わたしえつと、、こんにちわ？」

誰だ、俺は能力持った奴と仲良くなかならないと決めているん
だが
どうやって切り抜けようか

「あれ、聞こえませんでした？
お、おーい」

無視だ無視

「私そんな強くないっていうか
たいした能力持ってなくて仲良くなれる人捜してて、、」

いや、お前にはきつと鉄のハートとかいう能力がありそうなんだが
なんでこいつ一人で話し続けられるんだ
だが能力を持ってないのか、、

「こんちわ」

返事を返す

「わ、喋った
あ、こんにちわ」

「・・・」

「・・・」

これは俺が返さなくてはならないのだろうか
そもそもこいつは誰だ

そんな時スピーカーから放送が入った
どうやらあいさつが終わったらしい

「毎年のことですが、入学者が定員を割ったので
今から最後の試験を始めます」

「ただ今から、レクリエーションとして
配布した学生証を奪い合っていたいただきます
今から6時間後に2つ以上の学生証を持っていた方を合格とするの
であしからず」

なんだそれはお前らが適当な入学試験をするからわるいのだ
そんなこと一言も聞いてないぞ

これはやばい

俺は何もできないじゃないか

呪いってのは数日前から準備してやっとなら
相手を転ばせる位の力なんだ

呪いのわら人形は作ってあるが名前がないと使えないし
もし使ってもかすり傷を負わせる程度しかない

まだ目的は何も達していないのにこんなところで
リタイアなんて御免だ

「に、逃げましょう」

ここにいたら死んじゃいますよ」

さっきの奴が俺のをにぎってひっぱりあげようとする
さすがにそれはないだろうと思っていて」と

なんだあれは

竜が炎を吐いている

召喚術ってやつか？

「ここにいたら丸焼きですよ!!」

いやそんな馬鹿な

だが俺は能力者ってのをなめてたかもしれない
もうズボンが焼けた

俺たち体育館の外に出た

そういえば気になることがあった

「なあなんで俺のことを助けようとするんだ」

「私が教えてほしいですよ!!」

「なんだそれは」

呪術師（後書き）

次回！！

ついにバトルが来るかも！！

でもバトルって何をするんだ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7682y/>

最弱の英雄伝

2011年11月23日23時53分発行